

## セミナー参加報告

日本植物学会第84回大会ダイバーシティ推進ランチョンセミナーのウェブ開催に参加しましたので、以下に詳細、概要を報告します。

**題名：海外どうですか？～欧・米・アジア、比べて見えてくる多様な研究ライフ～**

**主催：公益財団法人日本植物学会・ダイバーシティ推進委員会**

**日時：2020年9月20日（日）13:15～14:30**

今年から日本植物学会の男女共同参画委員会はダイバーシティ推進委員会に名前を変更しました。新しい委員会名最初のセミナーということで、「ダイバーシティ」そのものに焦点を当て、アメリカ合衆国、ドイツ、中国でポストを得て研究を行っている日本人研究者3名をパネリストに据え、国や地域の事情がさまざまであること等が紹介されました。3人のパネリストは、アメリカ合衆国ウィスコンシン大マディソン校で名誉フェローを兼務する埼玉大学の豊田正嗣准教授、ドイツマックスプランク研究所・中野亮平トーマス研究室長（Principal investigator; PI）、中国福建農林大学・山室千鶴子教授です。各国の研究環境、ことば、文化等を説明いただき、日本と世界各国の違いを認識するとともに、日本の現状や今後取るべき対応の方向性等を感じることができたと思います。

### 指導的な地位にある女性研究者の割合

まず、基本情報では、日本は指導的な地位にある女性研究者の割合を2020年度に30%を目指していましたが、4月時点での現状は16.6%でした。この割合は世界153か国中最下位でした。ライバルと目される韓国は108位でした。他国の割合はアイスランド46.4%、イギリス38.7%、アメリカ33.4%でした。日本植物学会は教授は男性が多いですが、准教授以下の役職では男女比がほぼ同じで、日本の中では頑張っているようです。

### 研究所での子育てと男女比

アメリカの大学では子供を連れてくる女性研究者が多く、ベビーベッドも持ち込まれているとか。次世代の育成に関する考え方が日本とは違うようです。中国の大学はキャンパスが広めで、中に学生寮やスーパー等生活に必要なものが大体あるそうです。PIについてはアメリカや中国では半々くらいだそうで、中国では生物や植物を材料に研究する人に女性が多く、男性は物理や化学に多いようです。ドイツではPIの2/3が男性だけども、職員全体としての男女比はほぼ半々と言っていました。この他、アメリカの大学の特徴として多くの民族がいるようです。ウィスコンシン大では白人特にドイツ系が多く、次いで中国や韓国、そしてメキシコ系が多いと言っていました。日本人は少数だとも。



第11回 日本植物学会 ダイバーシティ推進委員会 ランチョンセミナー

9/20 (日)  
13:15-14:30

# 海外 どうですか？

～欧・米・アジア、比べて見えてくる多様な研究ライフ～



**豊田 正嗣**  
USA  
ウィスコンシン大学  
マディソン校  
(現 埼玉大学 大学院  
理工学研究科 准教授)



**中野 亮平トーマス**  
Germany  
マックス・プランク  
植物育種学研究所  
Department of Plant Microbe  
Interactions  
Principal Investigator



**山室 千鶴子**  
China  
福建農林大学  
HIST+IBMC  
教授

**プログラム**

13:15-13:20 日本植物学会会長 挨拶  
三村 徹郎 (神戸大学・名誉教授)

13:20-13:30 「日本植物学会におけるダイバーシティの現状」  
井川 智子 (千葉大学・大学院園芸学研究所・准教授)

13:30-14:30 パネルディスカッション「海外どうですか？」  
司会：島重才覚 (横浜市立大学・木原生物学研究所・特任助教)

研究の進め方に関わり、語学、グラント獲得、就職、生活、育児・・・一口に海外と言っても、国や地域で事情はきっとさまざま。今年のランチョンセミナーでは、3人のパネリストからアメリカ、欧州、中国での研究生活の様子を海外からもオンラインでリアルタイムに向い、比較を通して見えてくる日本の現状と今後の展望について、皆さんと考えてみたいと思います。今回は、Zoom webinarによる開催となります。

日本植物学会第84回大会に参加登録された方はどなたでも本セミナーに自由に参加できます。大会LINC-Bizサイトでアドレスをご確認ください。



(次頁へ続く)

(前頁からの続き)

## ポスドクのポジション

アメリカではポスドクは研究室の収入源がないとなかなか続けられませんが、技術を持っている人はいろいろな研究機関へ行き来し、長い期間ポスドクをしている人もいます。ドイツはドイツ国内での一定の期間を過ぎると、パーマネントに移らないといけない法律があるようで、ポスドクを続けたい人は他国へ行くしかありません。中国では大学支援のポスドク制度があり、この場合は2年間で終了し卒業式もあるようです。もちろん通常のポスドクもありますが、長い期間ポスドクをすることは良くないという考えがあるようです。

## 仕事時間

仕事に関してはアメリカでは夕方5時に切り上げて帰り、研究以外の自分の人生を楽しむ人が多いようです。ドイツも大体同じで、研究所に土日に出勤してくるのは日本人と中国人が多いようです。でもその判断するのは個人の意思だそうです。中国では昼間は良く働きます。パブミーティングのような夜の飲み会はあまりなく、家族を大切にすることで早く帰るそうです。育児会のようなものもあるようです。

## 履歴書

採用する時に出す履歴書ですが、アメリカでは年齢、性別や子供の数などを書く欄はないようです。ドイツも欄はないけれども、積極的に年齢や生年月日を書いてくる人が多いとか。アメリカやドイツではパブミーティングをするけれども、子供が一緒にいるので基本的にはあまり仕事の大切な話をしないともっていました。

## ことばについて

アメリカでは競争は厳しいがプロジェクト等の応募の年齢制限はあまりないようです。多くの人がどんどんアプライしていくとのこと。ESL (English as a second language) の人も多いようですが、そのことによって英語が上達することにもつながるようです。いろいろな応募には外国人でも教育の経験を書かないといけないので、ポスドクでもPIの授業の手伝いをし、内容をわからせるための上手なパワーポイントを作るようです。中国では研究所では英語、街ではたどたどしい中国語で通じるようです。研究所で中国語を勉強する機会はあるようです。ドイツも研究所では英語、下手でも気にしなくてよい。ケルンの街では英語のゴリ押しで通じるとか。でも幼稚園はドイツ語で、小学校から英語でいけるようです。

中野亮平トーマス氏はサッカーの日本代表ユニホームを着たお嬢さんと一緒に参加していました。時差が大きいので大変だったと思います。豊田正嗣氏、山室千鶴子氏とともに素晴らしい情報をいただきました。ありがとうございました。

## 日本について思うこと

7～8年前に大学教授と話した時に得た情報で、大学のドクターコースの学生は3割強が外国籍だとか。そこを卒業した人たちは就職していくのだから、一部の人が帰国したり新たな外国へ行ったりしても、会社や街中に2割強くらいは外国籍の人がいても不思議でないと思います。でも、実際にはあまり採用されていません。女性の職員数が少ないとかと同じように国際化の推進という点でも日本は遅れている気がします。日本や地域に固有の文化を守りながら、定住した外国出身者にその文化を教え、さらにはそうした人々から利用できる技術や手法を受け取れるようにしていくことが大切な気がします。今、大学に多くの外国籍の方が来ているのだから、就職先もしっかりと用意できることが、今後の日本の発展に必要なだと思います。

森林総合研究所 ダイバーシティ推進室

室長 伊ヶ崎 知弘 記

## DSO参加機関 イベントのご案内

### ■千葉大学■

## 第9回ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアム連絡会

【日時】2020年10月16日（金）14:00~15:30

【行事名】第9回ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアム  
連絡会

【題名】多様な人材が活躍できる環境づくりを考える

～ミニレクチャー：東京都立大学ダイバーシティ推進室の実践事例～

【講師】藤山新氏（東京都立大学ダイバーシティ推進室）

【内容】2011年にダイバーシティ推進室を開室して以降、一貫してダイバーシティ推進に取り組んでいる東京都立大学で、多様性を踏まえた構成員支援をご担当されている藤山先生をお迎えし、多様な人材が活躍できる取組の実践事例をご紹介します。

【参加方法】オンライン

【申込方法】文末のURLからお申込みください。URLにアクセスできない場合は、氏名、ご所属、連絡先を下記のE-mailまでご連絡ください。

【関連情報】

[https://www.gakuzyutsu.chiba-u.jp/diversity/info/chiba\\_conso\\_r021016.html](https://www.gakuzyutsu.chiba-u.jp/diversity/info/chiba_conso_r021016.html)

【問合せ先】千葉大学ダイバーシティ推進部門

(E-mail: [diversity-office@chiba-u.jp](mailto:diversity-office@chiba-u.jp))

【対象】DSO参加機関ほか、本テーマに関心のある方

【申込用URL】

<https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=VXoMLo0fA0GDkLmcF45iqZwGsknAVI5MrGzFM85Wc5ZURDg2MIZKUKhQJQINHVfHRSVvXNIXJMIFCQI4u>

第9回 ダイバーシティCHIBA 研究環境促進コンソーシアム連絡会

多様な人材が活躍できる環境づくりを考える

R2年10月16日（金）

14:00~15:30



オンライン

新型コロナウイルスの影響で、様々な活動が制限される中、誰もが活躍できる環境づくりの必要性はさらに高まっていくことが予想されます。今回は、2011年にダイバーシティ推進室を開室して以降、一貫してダイバーシティ推進に取り組んでいる東京都立大学で、多様性を踏まえた構成員支援をご担当されている藤山先生をお迎えし、多様な人材が活躍できる取組の実践事例をご紹介します。当日は、オンラインミニレクチャーの後、質疑応答や意見交換の時間も設ける予定です。コンソーシアム参加機関の他、本テーマに関心のある方の参加も歓迎します。

ミニレクチャー：東京都立大学ダイバーシティ推進室の実践事例

講師：東京都立大学ダイバーシティ推進室 藤山新氏

東京大学大学院社会学研究科博士後期課程修了、博士（社会学）  
世田谷区立男女共同参画センター職員、世田谷区男女共同参画推進政策  
調査官を経て2015年より現職。日野市男女平等参画推進委員、日本  
スポーツとジェンダー学会理事を務めるほか、日本スポーツ協会「スポーツ指導  
に必要なLGBTの人々への配慮に関する調査研究」研究員としても活動。



参加申込先 以下 URL からお申込みください

<https://forms.office.com/Pages/ResponsePage.aspx?id=VXoMLo0fA0GDkLmcF45iqZwGsknAVI5MrGzFM85Wc5ZURDg2MIZKUKhQJQINHVfHRSVvXNIXJMIFCQI4u>

URLにアクセスできない場合は、氏名、ご所属、連絡先を以下 E-mail までご連絡ください

千葉大学ダイバーシティ推進部門（ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアム事務局）  
〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33  
TEL&FAX 043-290-2020 E-mail [diversity-office@chiba-u.jp](mailto:diversity-office@chiba-u.jp)

ダイバーシティCHIBA研究環境促進コンソーシアムとは

現在、大学や研究機関15機関が参加し、年2回程度、連絡会を開催し、他機関の好事例やダイバーシティ推進に役立つ情報を学びながら、交流を深めています。随時参加機関・参加者を募集中です。

## DSO事務局からのお知らせと御礼

9月25日（金）のウェブ会議システムによるDSO総会ならびに懇話会は、お陰様で無事終了いたしました（写真）。ご参加、ご協力いただいた皆様、誠にありがとうございました。今回の総会を以て、森林総研の会長機関・DSO事務局としての任期は満了となりました。任期後半はコロナ禍で新しい生活様式を取り入れつつ、DSO事務局としての業務および活動に取り組むこととなりました。初めてのリモートによる総会・懇話会の開催には遠方機関からの参加もいただきました。この一年間、至らぬ点も多々あったかと思いますが、皆様のお蔭をもちまして無事に勤め上げることができました。改めて御礼申し上げます。今後は事務局が新会長とともに、農業・食品産業技術総合研究機構に移ります。森林総研ダイバーシティ推進室は引き続き参画機関、幹事機関としてDSOに貢献していきたいと思っております。今後とも宜しくお願い申し上げます。



Pick up

## 関連書籍の紹介

### 科学と社会的不平等～フェミニズム、ポストコロニアリズムからの科学批判～

サンドラ・ハーディング 著 森永 康子 訳 (株)北大路書房、2009年)

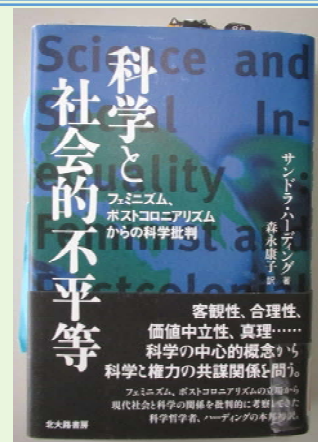
本書では、科学がどの様にかつての社会において変貌を遂げてきたかについて科学哲学者の視点から解説を行っている。ここでは、ダイバーシティに関連する“科学の多様性”について感想を述べることにする。(〈注〉フェミニズム：女性解放思想およびこの思想に基づく社会運動；ポストコロニアリズム：植民地主義の伝統がその後も様々な形を通して継続していること)

さまざまな地域において、文化や政治が科学における多様性を生み出している。さらに、『文化によって異なる科学が生む認知的多様性は、それ自体があらゆる人々にとって、科学技術の未来のための資源になるものだ。』と言及がある。つまり、多様性があることによって、豊かな文化と明るい未来が形成されるのであろう。

かつて性別や人種で差別され、科学が一部の者たちに独占されていた時代は、それほど昔の話ではない。人種の壁で阻まれたコミュニティの中で生み出され、独自の発展を遂げた科学が、壁が取り払われた現在、そして未来においてはどのような融合を遂げるのであろうか。また、グローバリズムの中では、モノや人、さらには科学研究の地域性も薄れてきている。多様性が市民権を得た社会の中で、果たして国や文化といった枠の中で育まれてきた既存の科学は、そのアイデンティティを捨てずに発展していくことが可能なのだろうか。多様性を認めることによって科学が目指す世界観が全て同一になることが、総じて科学界全体の発展に寄与するのか。これからダイバーシティを考える上で大切な視点ではないだろうか。

\* この書籍は森林総研ダイバーシティ推進室に所蔵されています。なお、当推進室の蔵書一覧は下記のサイトからご覧いただけます。  
森林総研HP>ダイバーシティ推進室>知る>ダイバーシティ推進室Library

【DSO事務局@森林総研】



## ニュースレターへの記事をご投稿ください!

「DSO Newsletter」は各DSO参加機関へ、それぞれで働く方へ、また広く外部に向けて情報発信するツールとして原則毎月最終週に発行しております。掲載を希望する記事がありましたら、数行の記事でも結構ですのでぜひお寄せください。

- ・シンポジウムやセミナー、講演会など、イベントのお知らせ
- ・最近行なわれたイベント報告、あるいは参加報告
- ・最近取組中のこと
- ・その他、お役立ちや関連情報

宛先：[dso-secretary@ffpri.affrc.go.jp](mailto:dso-secretary@ffpri.affrc.go.jp)

参加機関内外への当Newsletterの紹介も歓迎いたします。バックナンバーはDSOホームページにてご覧いただけます。

## ダイバーシティサポートオフィスのご案内

ダイバーシティ・サポート・オフィス(DSO)は、研究教育20機関をメンバーとして、平成19年より男女共同参画などダイバーシティに関わる活動を連携して推進しています。主な活動の一つとして、参加機関相互のイベント等の機会提供、情報交換を行なっています。当初は科学技術振興調整費の支援を受けてスタートしましたが、現在はイコールパートナーシップでメンバーが対等に運営する、より開かれたDSOとして活動しています。

\*DSOメンバー：産業技術総合研究所、森林研究・整備機構、物質・材料研究機構、農業・食品産業技術総合研究機構、千葉大学、筑波大学、神戸大学、土木研究所、国立環境研究所、国際農林水産業研究センター、防災科学技術研究所、高エネルギー加速器研究機構、理化学研究所、宮崎大学、上智学院、岡山大学、宇宙航空研究開発機構、大阪大学、量子科学技術研究開発機構、建築研究所(加入順)